
3.11 名も無き勇者たち

藪 冬彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3・11 名も無き勇者たち

【Nコード】

N1973W

【作者名】

藪 冬彦

【あらすじ】

東京港区高輪にある本社ビルも大きく揺れた。
東都電力の子会社である東都工業？原子力本部は、ビルの8階にあった。

都心を襲ったのは震度5強の地震だった。

技術部長の楠木征四郎は、福島第一原子力事業所からの一報を受け取った。

2011年3月11日 午後2時46分

三陸沖を震源地としたマグネチュード9.0という巨大地震が発生

したのである。

電源喪失（前書き）

名も無き勇者たちは、被曝の危険を顧みず、今も日夜、原発事故収束作業に追われている。

電源喪失

東京港区高輪にある本社ビルも大きく揺れた。

東都電力の子会社である東都工業？原子力本部は、ビルの8階にあった。

都心を襲ったのは震度5強の地震だった。

技術部長の楠木征四郎は、福島第一原子力事業所からの一報を受け取った。

「部長！1号機、2号機、3号機が自動停止！電源喪失により冷却機能がストップしました」と現場管理技術者兼支社長の中井誠からの緊急連絡だった。

福島第一原発1号機の冷却用タービンを回すポンプの外部電源が切断されたという報告だった。

さらに予備電源のディーゼル発電機も機能しないという最悪の状況を向かえていたのだった。

親会社の東都電力に連絡入れ、対応策を検討するために現地へ向かうことになった。

楠木は部下と現地に乗り込む準備をし、即座に社の緊急車両に乗りこんだ。

国道をひた走る車窓から田園が広がる風景を、見るともなく見てい

た。

2011年3月11日 午後2時46分

三陸沖を震源地としたマグネチュード9・0という巨大地震が発生したのである。

直後の大津波により壊滅的な被害が東北三陸沿岸から福島に至る広範囲にわたって起きていた。

楠木は、1986年に起こった旧ソ連でのチェリノブイリ原発事故を思い出した。

25年前、東京の工業大学を卒業後、東都工業に入社した年に起こったのである。

死者30名、鎮火するまで10日かかった原子力発電所の爆発だった。

拡散した放射能のレベルも高く、被曝者も相当数に上り除染するまで何年も要した。

楠木も原子力発電所の管理主任技師として10年前にウクライナを訪れている。

その廃墟と化した施設の姿を、今でもまざまざと脳裏に浮かべることが出来る。

（頼むからチェリノブイリの式の舞だけは避けてくれ）と心の中で念じた。

黄色に塗られた緊急車両の4輪駆動車が、福島県双葉郡大熊町にある東都電力？福島第一原子力発電所内の緊急対策本部にようやく到着した。

堅牢な建物の玄関先で、中井誠支社長が出迎えのために立っていた。中井支社長の報告によると、地震による負傷者8名と被曝の可能性ある負傷者1名を含む23名が事業所内の医務室に搬送されたとの事だった。

管理室に集まった現場技術者と対面した楠木は、現状の最新報告を聞いた。

原子炉は1号機から6号機まで、当日は4～6号機が点検のため停止状態にあり、地震による自動停止になったのは1号機～3号機迄であった。

さらに非常用ディーゼル発電機が津波にさらわれた為、1機しか稼働せずそれも間もなく故障したとのことだった。

よって原子炉内の燃料棒に対する継続的な注水冷却機能を喪失することになった。

楠木はさっそく東都電力に連絡を入れ、原子力災害対策特別措置法における第10条に基づく特定事象発生 of 各行政政府に対する通報を依頼した。

（とにかくあらゆる方法を取って原子炉を冷却させねばならない）
と楠木は事態の深刻さに頭を抱えた。

自分の命を賭けてでも復旧を遂行しなければ、日本が滅びると楠木は感じた。

なんとしても最悪のメルtdownだけは阻止しなければならない。

楠木は、携帯電話を取り出しアドレスデータの中から探しだした番号に架けた。

画面には、東京消防庁ハイパーレスキュー隊、隊長の神崎の名前が呼び出されていた。

彼とは学生時代からの竹馬の友だった。

「神崎 助けてくれ！」楠木は携帯を握り締めた。

電源喪失（後書き）

福島の子供たちを救うために名も無き勇者として我々は立ち上がりなければなりません。国家は国民の犠牲者を見ても見ぬふりをして隠蔽していこうと画策しています。どうか自分の身は自分で守る努力をしましょう。そして原発に頼らない道を模索していかなくてはなりません。

機動部隊

「神崎 大変な事になってしまった」と切迫した声で楠木は相手に訴えた。

「楠木 落ち着くんだ 原発が被害にあつたのか？」と冷静な神崎の声が応じた。

「今 福島にいる 原子炉の冷却が不能になり、このまま復旧しなければ日本は終わりだ」楠木

「それはまずいな その様子だと応急的対処は困難なのか？」と神崎は言葉を切った。

「今、原子力安全委員会に連絡を取っているところなんだ」

「楠木 聞いてくれ 今回の地震による被害は東北地方を襲い、特に三陸沿岸が壊滅的らしいんだ さらに第二第三波の津波警報が発令され余震も続いている」

「我々も今 情報の収集に躍起となっている」

「とにかく被害状況を早急にまとめて行政と地方自治体に連絡を取って欲しい」

「俺も消防庁に一報を入れておく」

「これから携帯電話も繋がりにくくなっていくだろう、固定電話の方がいいかもしれん根気よくコンタクトを取ってくれ」

突然、通話が切れた。

その時、余震と思われる揺れが関東地方を襲った。

渋谷に本部を置く第3方面救助部隊の神崎は、揺れる部屋の中で霞ヶ関の消防庁に連絡を取った。

だが、連絡官は総務省からの指示がない事と政府の東日本巨大地震緊急災害対策本部の設置を待っているため暫時待機しているように、という答えだった。

神崎は、政府の対応の遅さから事態の悪化を懸念した。

放射能の拡散が考えられる以上、迅速な対処が被害の拡大を防ぎ、事故状況の明暗をわける事が分かっていったのだ。

すぐに立川にある第8方面本部に連絡を入れた。

東京消防庁第8方面本部は、阪神・淡路大震災を教訓に編成された部隊である。

新潟県中越地震においても救援部隊として派遣された事例が一般の耳目を集めた。

また神崎の第3方面救助機動部隊は、毒劇物災害、生物兵器テロ・放射能災害に対応する部隊である。

消防救助機動部隊は第3方面本部の他に、第2方面本部（大田区：震災災害対応）と第8方面本部（立川市：震災災害対応）に置かれ、

機動救助隊、機動特科隊、機動救急救援隊で構成されている。

なお、平成19年4月25日には第6方面本部（足立区：震災災害及び大規模水害対応）にも新設された。

3月11日午後4時過ぎから枝野官房長官の緊急記者会見が開かれた。

三陸沖でM7・9の大きな地震が発生した。（後日M9・0に修正される）

国民の皆さんはぜひ、落ち着いて行動するようお願いする。

特に海岸近くにおられる方は、津波に警戒されて、高台の方に避難されるようぜひ行動を取ってほしい。

また、こういうときこそお互い助け合いの精神を発揮して、被害が最小限に食い止められるよう、一人一人の皆さんが行動してほしい。

政府としても、先ほど第1回目の緊急災害対策本部を開いた。

2度目も今後開催する。すでに、自衛隊にも派遣をお願いした。

消防庁、警察にも行動を始めていただいている。

政府として、できる限り被害を最小限にとどめるよう、全力を挙げて全身全霊、力を合わせて頑張っていくので、国民の皆さんにも、助け合いの気持ちを持って、冷静に迅速に行動し、本人、家族、

近所の皆さんが助け合って被害を最小限にするような行動を取ってくださることを重ねてお願いする。

そして記者の質問に答えた。

楠木は食い入るようにテレビの画面を見詰めていた。

緊急事態

国際原子力機関（ＩＡＥＡ）は、日本の経済産業省から福島第一原発など計４ヶ所の原発が停止したとの連絡受けたと発表した。

「楠木部長 女川原発 福島第二 東海の各原発も非常停止したそうです」中井支社長が電話を握り叫んだ。

「放射能漏れはどうだ？」と楠木は顔色を変えて訊いた。

「今のところ測定されていないようです」と中井が安堵のため息を漏らした。

明日１２日の未明に、東都電力の電源車が到着し復旧させる予定だった。

政府は、外部への放射能漏れの恐れがあるとして、半径３キロ以内の住民の緊急避難を指示した。

福島県大熊町、双葉町の両町合わせて５８６２人の避難だった。

そして３～１０キロ圏内の住民４万５３４５人に対しても屋内待機を指示した。

「万が一に備えた指示であり、落ち着いて避難をしてください」と枝野幸雄官房長官は呼びかけた。

しかし現場では、事の重大さが時間を経るうちに益々逼迫し始めていた。

「1号機の原子炉格納容器内の圧力が上昇はじめました」1号機の中央制御室から連絡が入った。

「緊急炉心冷却装置が自動起動しました」続けて叫ぶ管理官の声が聞こえた。

「1号機は今のところは安心だな」と楠木は呟いた。

だがそれもつかの間だった。

「非常用ディーゼル発電機も故障しました」と報告が上がってきた。

「何!」と楠木は絶句する。

「電源車が到着するまでもてば良いのですが・・・」と中井が心配顔で言う。

「支社長 問題は2号機だ 冷却水の水位が下がり始めているようだ」と楠木が監視モニターを見ながら言った。

しかし楠木の予想に反し、1号機は2号機よりも深刻な状況であった。

翌12日の午後、ようやく電源車51台が到着した。

さつそく2号機の冷却装置に送電を開始した。

どうやら水位が一定に保たれたようだった。

その時突然、中央制御室は轟音と共に揺れた。

楠木は、大きな余震が起こったと思った。

しかし午後3時36分、1号機が突如爆発を起こしていた。

炉心が1200度の高熱に達したため、燃料の一部が溶けたのである。

炉心を覆う皮膜管の金属と水蒸気が化学反応を起し水素ガスが発生、格納容器の外側と建屋との間に溜まった。

そして建屋内の水素ガスが酸素と反応を起こした結果、大爆発を起こしたのだった。

「炉心溶融！」という言葉が楠木の頭を過ぎった。

「3号機も異常高温になり始めました・・・」モニターから振り返った部下が中井と楠木の顔を見た。

「・・・」蒼白な顔をした楠木は天を仰いだ。

もう手の施しようない状況だった。

携帯電話を出した楠木は、藁をも掴む思いで、神崎に連絡を入れたのである。

炉心溶融

12日午後、原子力安全・保安院が会見を開き、1号機で炉心の一部が溶ける「炉心溶融」が起きた可能性があるとの見方を示した。

その会見を受け、枝野官房長官は避難指示を半径20キロに拡大すると発表した。

楠木は、東都電力本社へ連絡を入れた。

「1号機が水素ガス爆発を起し、現在3号機の冷却水の温度も100度近くに上がっています」

「緊急事態です」

「海水の注入を許可してください！」

「はい、勿論分かります。海水を使用した場合、設備の復旧が難しくなります。ですが・・・」

「副社長 このままメルトダウンし、取り返しのつかない結果に成るよりも、廃炉という決断も必要ではありませんか？」と楠木は説得するように言葉に重みを加えて言った。

「分かりました、そうさせて頂きます、ご英断に感謝致します」

楠木はさっそく中井所長に、海水注入のGOサインを出した。

海水は、海から引き入れ、たくさんの量を使用できるので、冷却の

効果が高い。

もともと原発には緊急用の海水注入系があり、温めた蒸気の冷却などに海水を使用している。

原発が海辺に建設されるのは、この為でもある。

1号機・3号機に海水注入が始まった。

「水蒸気が猛烈に発生するはずだ ベントは自動制御だな」と楠木はオペレーターの東電社員に訊いた。

部下は無言で中井を見た。

「楠木部長 ここは手動なんです」

「何！・・・」

楠木はその作業の危険さと作業に向かう社員の気持ちを思うとやりきれなかった。

その時、東電本社から電話が入った。

「総理が視察！」

「ばかな 今どんな状況分かっているのか？」

「原子炉格納容器設計最高圧（527・6 KPa）に到達しそうなんだぞ」

「勝つてにしろ！」と怒りを露に楠木は電話を叩きつけた。

「どうしたんです」中井が不安な顔をする。

「管総理がヘリで原発の視察だそうだ 危険だからベント作業を遅らせると言ってきた」

「それはまずいじゃないですか」中井は拳を握り締めた。

翌日の朝、二人はじりじりと時の過ぎ行くのを待った。

自衛隊のヘリで原発上空と被災地を視察した総理一行は、1時間ほどで帰って行った。

早速、水蒸気の圧力を下げるためベントを空け、蒸気を放出しようとするも、2つのうち1つが圧力がかかりすぎて開かない。

「開きません」と現場から悲痛の声で連絡が入った。

この作業で二人の作業員が怪我をして運び出された。

「最悪だ 圧力が下がらないと海水の注入も困難になる」と楠木は呟いた。

その言葉通りに、原子炉の水位がまた下がり始めたのだ。

3号機は危機的状況に陥いる。

轟音と共に建屋を吹き飛ばして、白い水蒸気を排出し始めたのだ。

恐れていた水素爆発だった。

福島県はこの日、福島市で午後5時以降、通常の500倍に相当する毎時20マイクロシーベルト以上の放射線量を観測した。

東都電力は東京を中心に計画停電を実施、500万世帯に拡大した。だがさらに危機的状況が続いた。

猛毒プルトニウムを包含する使用済み核燃料をプールしていた4号機が水素爆発を起したのだ。

建屋に穴が開き、そこから水蒸気が舞い上がっていた。

楠木はもう何が起きても驚きはしなかった。

しかし彼らが詰めている、1号機北側300mにある免震重要棟内にある対策本部の放射能感知器の緊急サイレンが突然鳴り響いた。

最終手段

神崎は消防庁本部に出向き、福島第一原発への出勤を直訴した。

しかし消防本部長からは難色を示された。

「今、被災地では自衛隊が政府の指示で復旧作業を展開している。まだ消防庁には政府の緊急対策本部からも出勤要請が下つてもいない、勝手な事は我々には出来ない」

「首都圏での大規模停電を回避するために計画停電が実施中でもある、余震も続いている中、不慮の災害に対する万全の備えも必要だ」

「残念だが仕方がない、いつ原発への出勤要請があるか分らんが、待機していてくれ給え」

「現場の指揮は君に一任するつもりだ その時は最善を尽くして欲しい頼んだぞ」

神崎は、食い下がろうと思ったが本部長の顔を見て言葉を呑んだ。

本部長の実家は福島だった事を思い出したからだ。

神崎は敬礼をして本部長室を退室した。

各方面の機動部隊には、連絡をとり福島第一原発の窮状を知らせていた。

放水部隊の精鋭を選し、現場慣れした強靱な体力と精神をもつ隊

員で編成するようにした。

また新婚者や子供の小さいもの、父子家庭や介護を必要とする家族のいる者は出来るだけ省いた。

選抜された機動部隊は、神崎からの出動命令を痺れをきらして待つ状態が続いた。

福島第一原発の緊急事態対策本部では、放射線量が毎時4千マイクロシーベルトを超えていた。

緊急警報が鳴り響いた。

楠木は、1～4号機の中央制御室にいた管理技術者全員を一時退避させ、対策本部に招集した。

十数名の東電社員の前で、楠木は現在の状況を説明し始めた。

「1号機が12日に水素爆発、2号機は炉心に一部溶融がみられた、3号機は14日水素爆発、4号機は15日に水素爆発及び出火が確認された。つまり全ての炉心において冷却システムが破綻し格納容器中の異常高温を発症している。もう我々では手の付けようがない状況である」

神崎はここで一度口を結び、悲痛な顔した全員を見渡した。

「ここで諦めてはならん、我々の家族そしてこの日本を救うためにも、ここにいる全員の持っている知能と経験を持って事態の打開を図らなければならない」

「とにかく冷却水の蒸発量より上回る注水が必要だ」

「どうしたらいいだろう？ 諸君」と楠木が訊いた。

暫くの沈黙の後、一人の若い技術者が手を上げた。

「海水を引き込むのが無理でしたら、上からかけたらどうでしょうか」

「どうやってかけるんだ そんなに大きなジョウロなんか無いんだぞ」と背後から声がした。

「自衛隊に協力を要請してはどうでしょうか」

「ヘリコプターで海水を汲み上げて、建屋が爆発した3号機と1号機に対し上空から投下するのです」

楠木はすぐに衛星電話を取り、東電本社に連絡した。

「よろしくお願いします」と言って受話器を置いた。

「明日16日に、自衛隊のヘリを2機出動要請してもらった。そして警視庁の高圧放水車2台と自衛隊の消防車両5台がこちらに向かっているそうだ」

陸上と上空から2段構えでの空陸注水作戦を決行するそうだ。

皆から歓声が上がった。

「まだ喜ぶのは早いぞ！」と中井支所長が叫んだ。

その時、管制室の照明が突然消えた。

「どうした」動揺する課員たちが身を屈めた。

「部長、非常用予備電源を見て来ます」と言った部下が懐中電灯を持ち部屋を出て行った。

暫くして部下が戻って来た。

「ディーゼルエンジンの燃料が切れました。ガス欠です」

福島第一原発は、15日の夜、漆黒の闇によって支配された。

レベル5

真つ暗闇の建屋内をほとんど手探りで進む作業員。

原子炉4基がそれぞれ深刻なトラブルを抱える中、作業員たちは大量被曝の危険とも戦いながら懸命の作業にあたっていた。

16日、自衛隊のヘリコプターが上空から水を投下しようとしたが、放射線量が高すぎて断念していた。

それは3号機からの白煙が上がり始めたからだった。

第一原発敷地内は、放射線量が高くなっていた。

毎時10ミリシーベルトの放射線量を計測、屋外で10時間作業しただけで、放射線作業従事者が緊急時にのみ許されている年間被曝量に達してしまう。

16日時点で第一原発に残っているのは東電社員や協力企業社員ら70人。

既に多くの被爆者を出していた。

楠木はマスコミからの電話に答えた。

「作業員にも家族がいる。できる限りのことはしているが、国民の皆さんにも分かって欲しい」

東日本大震災による東都電力福島第一原発の事故で、政府の災害対策本部は17日午後、冷却機能が停止した3号機の使用済み燃料プールに向け、自衛隊の消防車両5台で地上から30トン放水したと会見を開いた。

同日午前の陸上自衛隊のヘリコプターによる水の投下につき、燃料プールを冷却し、高濃度の放射線物質が外部に放出されるのを防ぐ前例のない試みだった。

危険回避に向け、懸命の作業が続いた。

17日夜、警視庁の高圧放水車が、途中で放水作業を中断。

現場での放射線量が高くなったため危険と判断し、現地を撤収したのである。

経済産業省原子力安全・保安院と東電はヘリによる冷却効果を強調した。

しかし今回の放水量は、空と陸を合わせてもプールを満たすのに十分ではなく、今後も継続的な放水が必要とみられた。

当初、海水を直接放水する計画だったが、ホースの接続などの際に隊員が被曝する恐れがあるため、車両のタンクの水だけを放水することに変更していたのである。

「楠木さん 米国に引き続きイギリスも韓国も原発より半径80キロメートル以内に住む自国民に対し避難勧告をした模様です」と中井が言った。

「原発先進国だ 放射性物質の恐怖をどこよりも感じている 日本からの脱出も視野に入れてるはずだ」と楠木は呟いた。

「ところで放水の効果は上がっているのか 放射線量の確認をしてくれ」とオペレーターの監視員に指示した。

「現在、約3・6ミリシーベルトです。自衛隊の放水後も放射線量は変わりません」と落胆の声が返ってきた。

3・4号機の使用済み核燃料プールの容量は、それぞれ約1400トンである。

ヘリコプターから投下された水は、7・5トンの容器で4回、最大でも30トン。

警視庁の高圧放水車や自衛隊の消防車両などは、1台当たり数トン。

「少なくとも数百トン以上は投入しないと、焼け石に水ですね」と中井は呟いた。

「水がうまくかかっても使用済み燃料からの崩壊熱が無くなるわけではない、一時的な処置だ」

「電源を一刻も早く復旧し、ポンプでプールに注水するのが本来の方法なんだ。これはそれまでのつなぎにすぎないのかもしれない」

「劇的な冷却効果を望んだ我々が甘かったんだ」と楠木はペットボトルのお茶を飲み干した。

経済産業省原子力安全・保安院は、18日、1～3号機の事故の深刻さを示す国際評価尺度（INES）を、8段階のうち3番目に深刻な「レベル5」と発表した。

それは米国スリーマイルアイランド事故と同レベルの世界最大級の原子力事故と認められたのである。

そして遂に政府の対策本部は、高層ビル火災などに使われる特殊車両を持つ東京消防庁のハイパーレスキュー隊に出動を要請した。

緊急消防援助隊

「楠木 たった今、ようやく我々に出動命令が下ったぞ」と神崎の心強い声が受話器から聞こえた。

「もう少しの辛抱だ 何とか持ちこたえて頑張ってくれ」

「ありがとう 神崎 到着を待ってる・・・」楠木は嗚咽をもらし言葉が出なくなっていた。

菅直人首相から石原慎太郎都知事に派遣要請があつたのは、17日夜。

東京消防庁トップの消防総監は「大変危険な任務だが、この災害には日本の国命と国運がかかっている」と隊員たちを東京から送り出した。

139人の緊急消防援助隊は、18日午後2時、原発から約20キロ離れたサッカートレーニング場に指揮本部を設置した。

東京消防庁は1995年の阪神・淡路大震災を教訓に、「消防救助機動部隊（通称・ハイパーレスキュー）」を発足させた。

大規模災害を想定した救急救助の装備と人員を備えた組織だが、原発への出動は初めてだった。

化学工場や高層ビルの火災、土砂崩れなど出動範囲は多岐にわたる。

96年の発足以降、部隊を増強し特殊車両や大型重機が配備された。2002年には、NBC（核・生物・化学）災害に対応する専門部隊が発足し、7万種類のガス状物質を分析・特定できる装置を搭載した特殊災害対策車を配備した。

2004年の新潟県中越地震でも救助に当たった。

今回のような原発事故を想定した訓練までは実施しなかったが、研究施設における放射能漏れなどを想定した訓練を積み上げてきていた。

放射能防護服や放射性物質の除染が出来るテントも保有している。

派遣隊長に抜擢された神崎警防部長は、サッカーグラウンドに整列した139人の隊員を前に志気を奮い立たせるかのように拡声器を握り第一声を発した。

「隊員の諸君、今、日本は未曾有の大災害に襲われている。

死者および負傷者9000人以上、行方不明者1万人を上回っている。

これ以上さらなる犠牲者を増やしてはならない。

今福島第一原発では、70人の関係者が被曝の危険を顧みず復旧作業に当たっている。

原子炉建屋への連続放水が、我々に課された任務だ。

敵は恐ろしく手強い奴だ。

日ごろの訓練通り進めば問題ないが、現場はそうはいかない。

無理をする事も時として必要だろう、だが退く勇気を持つことも大事だ。

全神経を尖らせ放射線量に注意して行動するようにして欲しい。

これから先発隊を組織して第一原発3号機の建屋を目指す。

約束しよう。

私が現場に最初の一步を踏み入れ、そして任務終了時は一番最後に車両に乗り込む事を。

誰も置き去りにはしない。

必ず全員で帰還することを約束する。神は乗り越えられる試練しか与えない。以上！」

副隊長が号令を発令した。

「大型化学車とスーパーポンパーの移動準備が完了しだい出発する、総員配置！」

第6方面隊と第8方面隊の2班が先発隊の役目を担った。

途中通りかかった双葉町は、ゴーストタウンだった。

人の気配が全くせず、信号機だけが規則的に点滅していた。

先発隊は国道288号線を原発へと突き進んだ。

車両に乗る隊員の緊張がピークに達していた。

連続放水

午後5時5分、現場確認をする先発部隊が、原発正門から第一原発3号機の建屋を目指し突入した。

スーパerpンパーが岸壁近くに近づき、屈折放水車に水を送る計画だった。

だが、岸壁が崩壊し、瓦礫や流木で埋まっていることが判明した。

進入が不可能なため、一旦退避せざるおえなかった。

指揮本部に戻った先発隊は、神崎のもと4時間の議論の末に決まったのは、瓦礫の上を人力で近道させるしかないという決断だった。

それは被ばくのリスクを覚悟で隊員たちが車外に出て、手作業でホースを延伸させる最後の手段だった。

午後11時半。

ホースを手で伸ばすための隊員20名を含め、放射線濃度測定係、運転手ら計40人が二つのチームに分かれ、マイクロバスなどに乗り込み正門から再突入した。

3号機から上がる白煙。

神崎が真っ先に車両から降り立った。

放射線防護服を身に着けた隊員が、100キロのホース計7本を次

々に手作業でつなげる。

常に別の隊員が放射線を測定した。

被曝、紙一重の時間との戦いだった。

約15分間で連結を終了し、19日午前0時半から原子炉建屋に放水が開始された。

神崎はその模様を確認し、原発災害対策本部を訪れた。

「楠木 待たせたな！」と笑顔で楠木の前に立った。

「神崎 遅いじゃないか！」と握手を求めてから抱き合った。

二人とも涙が止まらなかった。

その時、神崎の腰の無線機に一報が入った。

「神崎隊長 現在のところ順調に放水中です。60トンほど注水出来ました 成功です」

「了解 作業隊員はすぐに車両に退避して放水状況を引き続き注視するように」

「皆に良くやったと伝えてくれ」

「分かりました 失礼します」

「楠木 やったぞ 放水のパイプラインが確保された 成功だ」

対策室の内部にいた全員が、安堵のため息を漏らした。

中井支所長は、椅子に座り込んだ。

19日午後から設置できたホースや車両を活用し、無人状態のまま20日未明にかけて2000トン以上を放水した、掛かる作業は13時間以上に及んだ。

放水は午後9時半から再開された。

東都電力は20日、外部の送電線を引き込み2号機と5号機の電力を復旧させた。

機器を点検した上で21日以降、施設の制御機能を回復し、原子炉や使用済み核燃料プールの冷却を本格化させる予定であった。

各号機の中央制御室は、全体を見渡し操作をする中枢部で、機能の復活に期待がかかっていた。

電力が失われた福島第一原発で、安定的な電源を確保したのは震災後から10日ぶりだった。

照明が復旧した対策室で、楠木は各原子炉格納容器の状況を把握するように指示した。

一方、神崎は先発隊の隊員を帰還させることを決め、後続の部隊に引き継がせた。

自衛隊から高濃度の放射線を浴びた瓦礫の撤去作業のため戦車が投

入される。

だが21日の午後、3号機から突如黒煙が上がったのだ。

2号機からも水蒸気の白煙が噴出し始めた。

東電は作業員を建屋から退避させ、給水ポンプの復旧作業を一時中止することにした。

原発の復旧作業は綱渡りだった。

そして24日に被曝した3人を含め、17人の100ミリシーベルトを超える被曝者を出した。

楠木は東電本社に対し、協力会社の作業員の被曝が多発している現状を報告した。

その返事は、「続けるかは本人の意思」と云わんばかりの無慈悲な回答だった。

「下請けの社員は見殺しにしても構わんのか！」と楠木は拳を握り締めた。

この建物も免震重要棟と云われているが、ここにいってもじわじわと被曝することは間違いない。

自分の着ているタイベックスのスーツにしたって、放射線物質の皮膚への付着や体内への侵入は防げるが、ほとんどの放射線は防げない。

原子力発電所の作業は最先端で綺麗な仕事と思われがちだが、高い線量を浴びる被曝労働者の労働環境は決して良いとは感じない。

原発事故の誘因の一因が、そこにあるのかもしれないと楠木は思った。

消防隊長

「被ばく線量の最大値が自分でよかった」。

福島第一原発3号機への放水に参加した東京消防庁第3方面本部消防救助機動部隊の神崎部隊長（47）が24日、時事通信の取材に
ハイレスキュー
応じ、緊迫した作業を語った。

神崎隊長は18日午後5時すぎ、周囲の放射線量を測定できる「特殊災害対策車」に乗り込み、先陣を切って敷地へ入った。

放射線量の高い区域を調べ、放水車などの配置を決めるためだ。

しかし、作業は難航した。

水を吸い上げる予定の岸壁は崩壊し、別の地点からホースを伸ばす経路では、津波で横滑りした巨大タンクが行く手を遮る。

隊員が屋外に出て、人力でホースを運ぶ方法も強いられた。

神崎隊長らはホース運搬部隊の被ばく線量を測定。

隊員は胸に線量計を着用しているが、作業中は確認する余裕がない。

「自分の被ばく線量が彼らとイコールになるよう常に付き添った」

息苦しいマスク越しに大声を出し、必死で数値を伝えた。

「水が出たぞ」

無線機から一報が聞こえた。

「その瞬間、『やった』という達成感があつた。みんな同じ気持ちだったと思う」

全隊員の脱出を確認し、最後に敷地を出た。

胸の線量計は、全隊員のうち最も高い「27ミリシーベルト」を示した。

しかし、神崎隊長は「自分でよかった」とほっとした。

「自分の被ばく線量が最大ならば、隊員は自分より安全。それが我々のやり方だ」と話す。

敷地への進入前、神崎隊長は部下に問い掛けた。

「かなり困難な活動になるが、いいのか」

「やります」

弱音を吐いた隊員はいなかった。

「素晴らしい隊員を持ち、誇りに思う。一人一人が日本のために頑張らなくては。命令があれば、また行く」。

部隊は東京・渋谷の本部に戻った今も、次の派遣に備えて機材の整

備を続けている。

終話 名も無き勇者たち

東日本大震災は2週間が経つ26日現在、死者行方不明者が2万人を超えた。

避難所に身を寄せる被災者も24万人に達する。

今でも震度5クラスの余震が続き、原発事故などのために被災地での搜索活動が難航していた。

宮城県警は海中から多数の遺体を収容する可能性があるとしており、人的被害の全容は依然として明らかになっていない。

国の摂取基準を上回る放射性物質が検出された地域は、検査・規制にばらつきはあるものの7都県に拡大し風評被害の広がりが懸念される。

福島第一原発では25日、東電社員441人と、下請け会社などの社員95人が放射線への恐怖を抱えながら原発の復旧作業を続けている。

岩手・宮城・福島3県では物流ルートが徐々に回復し、被災地は息を吹き返しつつあった。

仙台港に支援物資を満載した大型フェリーが震災後初めて入港した。

ただライフラインの復旧は見通しが立っていない。

各地の自衛隊駐屯地から被災地への救難救助と支援物資の輸送、そ

して復旧活動に10万人の自衛隊員が派遣されている。

近県の警察隊も治安維持と救助活動に当たっている。

さらに避難所では、全国から駆けつけた医療関係者が不眠不休で治療に全力を傾けていた。

民間のボランティア団体も多数駆けつけ、手弁当で被災者の援護を続けている。

福島原発の復旧に当たっていた作業員3人が、極めて高い量の放射線に被曝し火傷を負った。

そんな中で20日には、9日ぶりに2人の被災者が大破した家屋の中から奇跡的に救出された。

多数いる行方不明者の家族の希望をつなぐ生還となった。

東京消防庁、神崎警防部長は会見の最後、妻から「日本の救世主になってください」と送り出されたことを明かした。

名も無き勇者たちは、危険を顧みず、今も日夜、救助作業と復旧作業に追われている。

最後に、東電のホームページに載っていた文面を紹介します。

原子力発電所では、異常が発生したときも、原子炉を「止めて」、燃料を「冷やし」、放射性物質を「閉じこめる」ことにより、安全を確保することとしています。

そのために、原子力発電所は、多重防護の考え方を基に設計を行い、運転員や係員の厳しい教育・訓練を行うなど、設計、建設、運転の各段階において、厳重な安全対策がとられています。このことにより、周辺に影響を及ぼすような大きな事故を未然に防ぐことが出来るものと考えておりますが、原子力発電所の防災対策は、万一、原子力による災害が発生した場合でも、その影響を最小限に抑えて、地域住民の方の安全を確保するように講じられるものです。

原子力発電所は、

- 1．異常の発生を防止する
 - 2．異常の拡大を防止する
 - 3．事故の影響を緩和する
- という多重防護の考え方による設計となっています。

更に安全性を向上させるため、起き得ないような事故が発生した場合にも事故の拡大防止や影響の緩和をはかる対策を実施し、アクシデント・マネージメント万全を期しています。

このように安全対策に万全を期しているものの、さらに防災計画を作成し、地域の皆さまの安全確保をはかるものです。

原子力発電所では「多重防護」の考えを基本に、念には念を入れた安全対策が講じられています。

加えて安全運転に万全を期するため「人間と機械の調和」に配慮し、機械面からだけでなく人間側にたった「ヒューマンファクター研究」への取り組みも行われています。

考えられる最大の地震も考慮して設計しています。

原子力発電所の建物や機器・配管などは、歴史上の地震や活断層の詳細な調査結果に基づき、周辺地域でこれ以上の規模では起こり得ないような大きな地震や直下型地震を想定し、これに耐えられる設備とするため、耐震上の重要度に応じてS・B・Cの3つのクラスに分けて設計しています。

津波への対策・原子力発電所では、敷地周辺で過去に発生した津波の記録を十分調査するとともに、過去最大の津波を上回る、地震学的に想定される最大級の津波を数値シミュレーションにより評価し、重要施設の安全性を確認しています。また、発電所敷地の高さに余裕を持たせるなどの様々な安全対策を講じています。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1973w/>

3.11 名も無き勇者たち

2011年8月29日12時04分発行